

スピノザ『知性改善論』における方法の問題 — 「道具」と「途」の形象を中心に —

秋保 亘

要 約

本稿は、スピノザ『知性改善論』（以下『改善論』）における「方法」について、「途」と「道具」の形象に焦点を当てつつ検討する。具体的にはまず、これら二つの形象に着目しながら、『改善論』への影響がしばしば指摘されるデカルトの『精神指導の規則論』との対比のもとで、スピノザの方法の性格を浮かび上がらせる。次いで、『改善論』における方法の位置づけにかんする議論の錯綜を、方法の内実を明確化しながら浮き彫りにしていく。そのうえで、この錯綜と連動する方法の射程の曖昧さを指摘し、それがさらに解釈者の側で、方法と体系の結びつきという思考の枠組み、および、『改善論』がスピノザ哲学の体系（とりわけ『エチカ』）への導入であると考えた先入見と結合することで、スピノザの思想全体における『改善論』の位置づけにかんする解釈者たちの誤解をもたらしている可能性を提示する。以上の議論を踏まえ、最後に、『改善論』の方法は『エチカ』への導入として企図されたものではなく、むしろよりひろい射程をもったいわば汎用的な方法なのではないかという仮説を提示し、それをいくつかのテキストにもとづいて検証する作業を行う。

キーワード：スピノザ、『知性改善論』、方法、途、道具

はじめに：方法をめぐる「途」と「道具」の形象

周知のように、「方法methodus, μέθοδος」の原義は、「途（ホドス）」「に沿って（メタ）」進むことである。まさに「ホドスとメトドス」という表題をもつ論文において加藤信朗は、「メトドス」というギリシア語が、「おそらく、前五世紀、もしくは、四世紀になって一般に使用されるようになった言葉であろう」と考証し、とりわけプラトンとアリストテレスによって、哲学上の意義を担う術語として導入されたものと推測している¹⁾。そしてそのアリストテレスにおいて、これまた周知のように、『分析論（前書・後書）』や『命題論』といったいわゆる論理学系の著作群が、「道具」を意味するギリシア語である「オルガノン」という名称によって呼ばれることになった²⁾。この事態を承けて、たとえば『分析論後書』の訳者高橋久一郎は、『分析論』は学問の「方法」にかかわる著作として位置づけられたことになる³⁾。かくて

古来より「方法」の概念領域のうちには、その語源として直接に「途」の形象が、そして哲学史を介して間接的に「道具」という形象が、きわめて重要な契機として含まれているのである。

ところで「途」という形象には、ことがらとして、到達すべき目的地（学問の場面では獲得されるべき知識）に至るまでの経路という意味と、（知識探究において）実際に踏破されるべき本道（すなわち探究の行程そのもの）という二義をみてとることができる⁴⁾。同様に「道具」もまた、実際の探究に先立ってあらかじめ整備しておくべきものであるとともに、探究の行程そのものにおいて実際に使用されるべきものでもあるだろう。こうした「途」および「道具」の形象を含む「方法」もまた、それゆえこれら形象それぞれの二義性を含まざるをえないことになるはずである。私たちには、ひろく哲学全般において方法が含まざるをえない微妙な問題の淵源が、まさにこの二義性にあるように思われる。方法にかんする微妙な問題——それが典型的に現れているのは、カントの『純粋理性批判』の位置づけに対するヘーゲルの次の論難であろう。

『純粋理性批判』が「方法についての論文であって、この学[形而上学]そのものの体系ではなく、来たるべき形而上学という体系には「道具[Organ]の批判、すなわち理性それ自身の批判」が先立たねばならないと言うカント⁵⁾に対して、ヘーゲルは以下のように言う。

批判哲学の主要なテーマとは、神や諸事物の本質などを認識しようと試みる以前に、あらかじめ認識能力そのものを吟味し、もってその能力がこのような務めを遂行することができるかどうかを知らなければならない、というものである。ひとは道具について、それを手段として実現されるべき仕事に着手する以前に、あらかじめ精通していなければならない。[...]ところが、認識の吟味は認識を行うことによつてのみ実現しうる。この道具と呼ばれるものの事例においては、道具を吟味するとは、道具を認識すること以外の何ものをも意味しない。しかし、認識する以前に認識することを望むことは、思い切つて水のなかに飛び込む以前に泳ぐことを習うという、かのスコラ学者が企てた思慮深い計画と同様に愚かしいものである⁶⁾。

問題はつまり、体系（形而上学）との関係における方法の位置づけである。

本稿は、スピノザが『知性改善論』（以下『改善論』）において主題的に論じている「方法」について、「途」と「道具」の形象に焦点を当てつつ検討していく。具体的にはまず、これら二つの形象に着目しながら、『改善論』への影響がしばしば指摘されるデカルトの『精神指導の規則論』（以下『規則論』）との対比のもとで、スピノザの方法の性格を浮かび上がらせる（I-II節）。次いで、上に見た「途」の二義性に関連すると思われる、『改善論』における方法の位置づけをめぐる議論の錯綜を、方法の内実を明確化しながら浮き彫りにしていく（III-IV節）。そのうえで、この錯綜と連動する方法の射程の曖昧さを指摘し、それがさらに解釈者の

側で、方法と体系の結びつきという思考の枠組み、および、『改善論』がスピノザ哲学の体系（とりわけ『エチカ』）への導入であるとみなす先入見と結合することで、スピノザの思想全体における『改善論』の位置づけにかんする解釈者たちの誤解をもたらしている可能性を提示する（V節）。以上の議論を踏まえ、最後に、『改善論』が語る方法の射程にかんする私たちなりの仮説を提示し、それをいくつかのテキストにもとづいて検証する作業を行う（VI-VII節）。

I：デカルト『規則論』における方法の位置づけ

デカルトの若いころの未完の著作であり、明示的に「方法」への言及が見られる『規則論』⁷⁾と、彼の形而上学が展開されている『省察』をめぐって、マリオンはそれらが方法と形而上学との交錯した関係という「恐るべき困難」を示していると言う⁸⁾。要点のみをいえば、その困難とは、方法と形而上学とが、デカルトの思想における二つの自律的な契機であるのか、あるいはそれらが部分的にであれ全面的にであれ重なり合うことになるのか、そのいずれであるのか判別しがたい、ということである⁹⁾。方法と体系の関係は、かくて私たちが関心とする17世紀哲学の解釈史においてもなお問題となっているのである。

まさに「方法」の定義が見出される「規則4」の前半部¹⁰⁾、およびそれに関連するいくつかのテキストにかぎっていえば、しかし方法の位置づけにかんするデカルトの立場は明瞭であるように思われる。

[...] 方法なしにもの [res] の真理を求めようとするよりも、ものの真理を求めることを決して考えないほうがはるかにましである。というのも、このような順序づけられていない研究と不明瞭な省察によっては、自然の光が曇らされ、また精神が盲目にされることはきわめて確実だからである。[...] ところで、方法ということで私は、確実に容易な規則——それらを正確に遵守するひとは誰でも、決して偽なるものを真なるものとみなさず、また精神のいかなる努力をも無益に浪費することなく、むしろ徐々につねに学知 [scientia] を増大させつつ、その達しうるかぎりのすべてのものどもの真なる認識へと至るであろうような諸規則を知解する。

ここで次の二点が注意されるべきである。つまり、決して偽なるものを真なるものと想定しないこと、そしてすべてのものの認識へと至ることである。[...] けれどももし方法が、真なるものと反対の誤謬に私たちがおちいらないうために、いかなるしかたで精神の直観が用いられるべきかを、またすべてのものの認識へと至るために、どのようなしかたで諸々の導出が発見されるべきかを正しく説明するのなら、方法が完全であるためには、[これら以外の] 他の何もかも要求されないように私には思われる。というのも、精神の直観あるいは導出によってのみ学知を有することができるということが、すでに以前に語られたからである。また、方法はこれら二つのはたらきそのものがいかなるしかたで形成される

べきかを教えることまでは拡張されえないからである […]」¹¹⁾。

このテキストに加え、「真理の確実な認識に向かって人間たちにひらかれている途は、明証的な直観と必然的な導出のほかはない」と言う「規則12」の言明¹²⁾を勘案するなら、方法は獲得されるべき認識へと導く途、つまり目的地に至るための経路、したがって体系に先立つものとして理解されているといえよう。アルキエもまた上の引用部にかんして次のように言う。「方法は、その語源の意味において経路であり、つまり目的地に到達することを可能にするものなのであって、この目的地そのものと混同されることはない。知的な分野において、方法は、認識であるところの目的地とも、認識能力とその行使である道具とも混同されることはない。方法が指し示すのは、目的の獲得にもっとも適した道具の使用法である¹³⁾」。つまりここで方法は、私たちにいくつかの認識能力がそなわっていることを前提としたうえで、また諸事物についての実際の探究、すなわち諸事物についての認識の獲得に着手する以前に、その認識の獲得が順序立ったしかたで実現されるために、それら認識能力（すなわち道具）がいかに用いられるべきかを規制するものと考えられている。

しかしそれだけではない。私たちにそなわっている認識能力がそもそも何をなしうるのか、それはどこまでおよぶのかを、あらかじめ明確にしておかなければならない。デカルトは言う。「精神[animus]が何をなしうるのかについて、私たちがつねに不確かであることのないように、また誤った軽率な努力をすることのないように、ものどもを個別的に認識することにとりかかる前に、一生に一度は細心の注意を払って尋ねてみるべきである、人間理性になしうる認識はいかなるものであるかと」。さらにデカルトは続ける。この検討が必要であるのは、その「検討のうちに、知ることの真の諸道具および全方法 [vera instrumenta sciendi & tota methodus] が含まれているからである¹⁴⁾」。このテキストを素直に受けとるかぎり、人間の精神あるいは理性によってなしうる認識の画定に方法の全体が含まれることになり、さらにこの方法の位置づけは、明白に認識の実際の獲得以前に定められている¹⁵⁾。そうであるなら、先に引いたカント批判哲学に対するヘーゲルの論難が、そのままデカルトにも妥当することになるだろう。

以上のようなデカルトの言明を承けて、マシュレは、「知の実際の展開に対する方法の優位」を指摘し、『改善論』においてスピノザがはじめて「途」と「道具」の形象を持ち出す第30節の議論が、まさにこの「方法についての伝統的な考え方」の批判となっていると論じる¹⁶⁾。『改善論』におけるこれら二つの形象の意義、および方法の性格と位置づけを明らかにすることを目指して、スピノザがこの第30節を書いているときに手元に置いていなかったということが「ありえないように思われる¹⁷⁾」とさえ言わしめるほど多くの共通点をもったテキスト、デカルトの「規則8」の一節を引こう。

この方法はじつに、機械的技術のなかで、他の技術の助力を必要とせずに、おのれに属する道具がいかに形成されるべきかを自ら教える技術に似ている。というのも、誰かがそ

れら技術のなかのひとつ、たとえば鍛冶屋の技術を実行しようとし、しかもあらゆる道具を欠いている場合、はじめはもちろん、鉄床の代わりに硬い石や整形されていない鉄の塊を用い、ハンマーの代わりに石塊を手に取り、木片をやっとこ状に整え、この種の他のものを必要に応じて集めねばならないであろう。次いで、これらを準備した後、ただちに剣やら兜やら、何であれ鉄から作り出されるものどもを、他人の使用のために鍛えようと努めるのではなく、むしろ何よりも先に、ハンマー、鉄床、やっこやその他自分自身にとって有用なものを制作するであろう。この例が私たちに教えているのは、こうした手はじめの状況においては、練り上げられていないいくつかの規則 [praecepta]、つまり技術によって準備されたというよりはむしろ私たちの精神のうちに生来そなわっている [ingenitum] と思われる規則しか見出されえないので、ただちにそれらを利用して哲学者たちの論争を解決するとか、数学者たちの難問を解くとかを試みるべきではなく、むしろそれらの規則を用いて、まずは何であれ真理の吟味にとってきわめて必要である他のもの [規則] どもを、全力を挙げて探究すべきである、ということである¹⁸⁾。

ここには、方法をめぐる三段構えの議論が見出される。第一に、石塊や木片に比され、技術に先立つものとして自然にそなわるものとされる生来の「規則」。第二に、ハンマーや鉄床に比され、それこそがまさに「道具」であるような「規則」、すなわち、第一の生来の「規則」を用いて探究され、形成される「方法」。そして最後に、その方法によって遂行されるべき「真理の吟味」ないし探究。以上の三段構えの議論が見出されるのである。

ところで、石塊や木片がその用い方次第では道具をつくるための道具になりうるのと同様に、その用い方次第では方法を形成する手段となりうる生来の規則とは、「規則4」の表現によれば、「そのうちに有益な思想の最初の種子」が含まれる、「人間精神が有する何か知らないが神的なもの [nescio quid divini]」、あるいは「人間の精神に自然によって植え付けられた真理の最初の種子」に相当するものであると考えられる¹⁹⁾。そうであるとすれば、真理探究に先立つべき方法にさらに先立つものであるこの「真理の最初の種子」は、まさに種子の状態として、真理を獲得するに至る可能性しか示さないものであるだろう。しかもこの種子が含まれるとされる「何か知らないが神的なもの」は、強調部が示すとおりはっきりと規定されておらず、『規則論』全体を検討してみても、結局のところこの「神的なもの」が、真なるものの顕現の条件という役割をあらかじめ付与されている何かという以外には、その内実は不明なままである。

まとめよう。まず、認識の獲得に着手する前に、その獲得に必要な道具としての方法を整備する必要がある。しかしこれは、「認識する以前に認識することを望むこと」であり、「愚かしい」試みにならざるをえないのではないか²⁰⁾。次に、その方法を整備するためには、石塊や木片のような自然物に比される、人間精神に生来そなわる何か、真理の種子を利用する必要がある。ところが、「方法論的な開始点²¹⁾」にかかわるこの「真理の最初の種子」は、『規則論』において未規定なままにとどまる。そうになると、目指すべき真理の獲得そのものが、その出発点

からぐらついてしまうことになるのではないか。それゆえ真理を獲得するに至る可能性は、結局のところ徹頭徹尾可能性のままにとどまってしまうことになるのではないか。

II: 『改善論』における方法をめぐる二つの形象

「途」および「道具」の形象が『改善論』においてはじめて登場する、第30節までの議論を簡単にまとめることから議論をはじめよう。

スピノザはまず、「精神が全自然ととりもつ合一についての認識」を他の人々とともに獲得することを、諸学における唯一の目的として設定する（第13, 第14節）。この目的を達するためには、スピノザによれば、「知性がものどもを首尾よく、過たずに、そしてできるだけ最良のしかたで知解することになるように知性を治療し、また許されるかぎりをはじめのうちにそれを浄化する様式」を「何よりも先に」考え出さなければならない（第16節）。いいかえれば、このように「知性を改善し」つつ目的を達するために必要なものの知得様式を選び出さなければならない（第18節）。そしてこのような手段として選び出されるのが、「ものがその本質のみを介して、あるいはその最近原因を認識することを介して知得される」という「第四の様式」である（第19, 第29節）。このように、至るべき目的が明確に定められ、さらにそこに至るための手段、およびその手段が満たしているべき条件が明らかにされた。「方法」ということばとともに、「途」および「道具」の形象が現れるのは、まさにこの直後である。

どのような認識が私たちに必要であるのかを知ったからには、私たちがそうした認識によって、認識されるべきものどもを認識する途、ならびに方法が叙述されるべきである。そのためにまず先に考察されるべきであるのは、この点にかんする無限に続く探究など生じないだろう、という点である。どういうことかといえば、真なるものを探究する最上の方法を発見するために、真なるものを探究する方法自体を探究するための別の方法が必要とされ²²⁾、またこの第二の方法を探究するために、さらにまた別の第三の方法が必要とされる、というしかたで無限に続いていく——このようなやり方では決して真なるものの認識へと至らないどころか、そもそもいかなる認識へも至らないであろう、ということである。こうした事態はじつに物体的道具にまつわる事情と同様であって、ここでも同じしかたで論を進めることができよう。というのも、鉄を鍛えるためにはハンマーが必要であり、そしてハンマーを手にするためにはそれをつくる必要があって、ハンマーをつくるには別のハンマーと他の諸道具が必要であり、これらを手にするためにもまたさらに別の諸道具が必要となるだろう、といったように無限に続く。そして誰かがこうした論じ方で、人間たちが鉄を鍛えるいかなる力をも有していない、ということを証明しようとするなら、それは無駄な努力だろうからである。実際のところはしかし、人間たちは手はじめに生来そなわった諸道具を用いて [innatis instrumentis], いくばくかのきわめて簡単なものを苦

労して不完全にはあるがつくることができたし、またこれらをつくりあげたのちには、それらに比してより困難な別のものどもを、より少ない労力でより完全につくりあげたのであって、このようにきわめて単純な作業から道具へと、またこれらの道具からさらに別の作業ならびに道具へとだんだんと進んでいき、かくて〔彼らは〕多くの、そしてたいそう困難なものどもをわずかな労力で完成させるに至ったのである。これと同様に知性もまた自らの生まれ持った力によって〔vi sua nativa〕、自己自身に対して知性的な諸道具をつくり与え、それらを用いて別の知性的な作業を遂行する別の諸力を獲得し、さらにこれらの作業からまた別の道具を、いうなら、なおいっそう探究を進める力を得、かくてだんだんと進んでいき、ついには智慧の頂に達するようになるのである。(第30節, 第31節)

このテキストはたしかに、上に引いたデカルトの「規則8」の一節と多くの共通点をもつ。デカルトが石塊や木片に比していた、人間精神に生来そなわる何かに相当するものは、このテキストにおいては知性の「生まれ持った力」である。しかしここまでのテキストではまだ、この知性の力とは具体的にはどのようなものなのか、およびこの力と方法の関係、さらに方法と途および道具との関係も明確ではない。スピノザはすぐ次のように続ける。「さて、知性をめぐる事情がかくのごとくであること、この点は、真なるものを探究する方法とは何かを、ならびに、なおいっそう〔探究を〕進めるために他の諸道具を製作すべくそれだけは必要とされる、あの生来そなわった道具とはいかなるものであるかを知解しさえすれば容易にみてとられるであろう」(第32節)。この「生来そなわった道具」、知性の「生まれ持った力」とは、スピノザによれば、すでに私たちが有しているという「真の観念」——その観念の対象の「本質」とらえらるゝとされる「真の観念」にほかならない(第33節)²³⁾。こうした議論を踏まえ、スピノザは次のきわめて重要な帰結を導き出す。

真理そのもの、あるいは諸々のもの²²⁾の对象的本質、あるいはそれらのもの²²⁾どもについての観念が(これらはすべて同じものを意味する)しかるべき順序で探究される途こそが真の方法である、ということが帰結する。(第36節)

私たちはすでに、たとえそれがわずかなものであれ、真理を手にしてしている。そしてその真の観念を出発点となる道具として用いることで、さらなる真理を獲得していく途こそが「真の方法」であると語られている。デカルトにおいて出発点とされていた「真理の最初の種子」は、それが具体的に何を示すのかについて未規定のままにとどまり、またあくまで真理獲得の可能性のみを示すものと理解され、さらにこの種子は方法とは別のもの、いいかえれば方法にとって外的なものであった。そして方法そのものは、認識の獲得以前に整備されるべきものであった。それに対して『改善論』における真の観念は、その後のスピノザの思想の展開を鑑みれば問題含みの概念であるとはいえず²⁴⁾、しかしこのテキストにかぎってみればはっきりと規定され

たものである。しかもこの真の観念は、知性の「生まれ持った力」の行使として、私たちがすでに（全面的にはないにせよ）実現している真なる認識である。かくて「真の方法」が「真の」と形容されるのは、その方法がすでに真なる認識の領野に位置しているからであろう。いいかえれば、「この方法は、私たちの認識をその外部から正当化するような、私たちの認識に外的な何かではありえない²⁵⁾」。さらに、ここまで見てきた第36節までの議論では、方法と途および道具の形象の関係は明瞭である。私たちが有している真の観念を「生来そなわった道具」（cf. 第39節）として用いることで、他の諸真理をさらなる道具として獲得しながら、「しかるべき順序で探究」を進めていく途こそが「真の方法」とされるからである。つまり少なくともここまでの議論にかぎってみれば、真の方法は、真理の探究およびその獲得に先立つものではなく、むしろ実際の認識の獲得と一体となったものとして理解されている。しかしそうであるとしたら、この真の方法の途はすでに体系そのものなのではないか²⁶⁾。じつにスピノザは、この第36節に付された注において、「魂における〔この〕探究がいかなるものであるか、この点は私の哲学において説明される」と言うが、この「私の哲学」という表現が、『神、人間および人間の幸福にかんする短論文』（以下『短論文』）を示すのか『エチカ』を示すのか議論されているとはいえ、スピノザ哲学の体系を示しているという点で諸家は一致しているのである²⁷⁾。

III：途の形象にかかわる方法の位置づけの錯綜

ところが、方法と途の形象をめぐるこれ以降のスピノザの議論は、方法と体系の関係、および方法がはたすべき役割にかんして、きわめて錯綜した議論を展開している。可能なかぎり問題点を解きほぐしながら検討を進めていこう。

「真の方法」が提示されていた上の引用の直後にすぐさま、ここまで見てきた理解と両立しがたいように思われる言明が現れる。スピノザは言う。「方法は、諸々のもの^{もの}の原因を知解することを目指して推論することそのことではないし、ましてや諸々のもの^{もの}の原因を知解すること自体ではな^なお^おさ^さら^らない」（第37節、強調引用者）。そして、「もの^{もの}どもをその第一原因を介して認識する」必要性を説き（E1P8S2）、実際にあらゆるもの^{もの}の「第一原因」である神＝自然（cf. E1P16C3）からの導出を遂行する『エチカ』を念頭に置くなら²⁸⁾、ここでの「方法」の適用範囲はかなり限定されており、明らかに体系そのものと同一視することはできない。これと同様の問題は以下に示す別の箇所でもまた確認できる。

私たちが先に引いた第30節冒頭でスピノザは、「どのような認識が私たちに必要であるのかわかったからには、私たちがそうした認識によって、認識されるべきもの^{もの}どもを認識する途、ならびに方法が叙述されるべきである」と語っていた。そして必要とされる認識とは、「もの^{もの}がその本質のみを介して、あるいはその最近原因を認識することを介して知得される」という「第四の様式」であった。それゆえ方法は、認識されるべきもの^{もの}を、その本質のみ、あるいはその最近原因を介して認識すべきであることになろう。そうなるこの「途、ならびに方法」

は、やはり認識の獲得そのもの、すなわち「哲学」そのものなのではないか。ところがスピノザは言う。「私はここ [[改善論]] で各々の知得 [仮構された知得, 偽なる知得, 疑わしい知得] の本質を説明しようとしているのでも、それをその最近原因によって説明しようとしているのでも」ない、「というのもこの点は哲学にぞくするから」であると (第51節)。

しかしながら、第37節は次のようにことばを継ぐ。「むしろ方法は、真の観念をその他すべての知得から区別し、その本性を究明することによって、真の観念とは何かを知解し、そのことによって私たちの知解する力能を知り、そして精神を統御して、知解されるべきすべてのものをこの [真の観念という] 規範にのっとって知解するようにさせ、また補助手段として確実な諸規則を与え、かくてさらに精神が無益なことによってわずらわされないようにすることに存する」(強調引用者)。ここではまた、とりわけ強調部が示すように、方法は体系と一体になっているのではないか。

以上のように、ここまで見てきた『改善論』の冒頭に近い箇所ですでに、途としての方法がはたすべき役割、あるいはその方法がおよぶべき射程をめぐるスピノザの思考の錯綜がみてとられる。はたして「途」としての方法は、体系(「哲学」と一体のものであるのか、それとも体系とは区別されるものなのか。この問いを携えつつ、さらに読解を進めていこう。

IV: 「反照的認識」としての方法

いま引用したばかりの一節の前半をもう一度とりあげてみよう。方法の一部は、「真の観念をその他すべての知得から区別し、その本性を究明することによって、真の観念とは何かを知解し、そのことによって私たちの知解する力能」を知ること存すると言われている。第39節では、「真の観念が知解されれば、それと同時に、このような知得とその他すべての知得のあいだにある差異もまた知解される [...]。まさにこの点に方法の一部が存する」と、ほぼ同様のことが繰り返し述べられている。ほぼ同様というのは、前者の引用では、真の観念を他の諸知得(すなわち偽なる観念、仮構された観念ならびに疑わしい観念²⁹⁾)から区別することによって、真の観念の内実が理解されるという順序に見えるが、後者の引用では真の観念の内実理解と、その他の知得との区別が「同時 [simul]」とされているからである。しかし、この微妙な表現の違いは問題ではない。それは、これらの引用で語られていることがらから帰結し、しかも『改善論』における方法の内実理解にとってきわめて重要な以下のテーゼを分析することで確認できるだろう。

以上のことから、方法とは反照的認識 [cognitio reflexiva³⁰⁾]、あるいは観念についての観念にほかならない、ということが結論づけられる。そしてまず観念が存しなければ、観念についての観念も与えられないのだから、したがって方法はまず観念が存しなければ与えられないことになろう。この点からして、精神が、与えられている真の観念³¹⁾の規範

にのっっていかに導かれるべきかを示す方法こそが、よい方法であることになろう。(第38節)

先に見たように、真の観念は、知性の「生まれ持った力」の行使として、私たちがすでに(全面的にはないにせよ)実現している真なる認識である。そしてたとえば仮構された観念は、明晰かつ判然としたものではなく「混然としたもの」と呼ばれるけれども、その理由の一端は、複数の要素から構成されるものを「部分的にのみ認識」する点に求められ(第63節)、要するに仮構された観念であってもなお思惟する力の行使にほかならない。加えて方法は、ここでは、こうした思惟する力の行使である観念について認識すること(「観念についての観念」)、すなわち「反照的認識」である。したがってこの方法は、現実に行使されている思惟力能に外的なものではなく、またその行使に先行するものでもない。この意味での方法は、それゆえマシュレの言うように、「真なるものの顕現の条件ではなく、むしろ反対にその結果、その帰結である³²⁾」。

さて、反照的認識としての方法は、真の観念と他の諸知得のあいだの差異を理解させつつ、真の観念そのものの内実を理解させる。いまやこの言明の意味は明らかであろう。私たちがどのようなタイプの思考パフォーマンスを行っているときに、真なる認識を行っていると言えるのかを理解することは、同時に、たとえば仮構された認識と真なる認識とのあいだには、思考パフォーマンスとしてどのような違いがあるのかを把握することでもあり、逆もまたしかりである——これこそが確認すべき点であった。したがって「よい方法」とは、精神が偽なる認識や疑わしい認識におちいることなく、たえず真の認識という思考パフォーマンスを実現できるように精神を規制するものにほかならず、それはまた結果的に、「仮構された知得、虚偽の知得、ならびに疑わしい知得がいかなることがらにかかわるのか、および私たちがそれらの各々からいかにして解放されることになるのか」を示すものでもあるだろう(第51節)。ではこのような手続きによって識別される真なる認識という思考パフォーマンスとは、具体的にはどのようなものであるのか。以下ではこの手続きが実行されている「方法の第一部」(第50節)、『改善論』の大きな部分を占める第50節から第90節を、真なる認識の内実を示唆してくれる箇所への焦点を絞って整理していこう。

まず真の認識は、それ自身とはことなる原因によって実在するようになるものについて、そのものの実在の必然性、あるいは不可能性をとらえるものである(第52、53節)。またそれは、神の実在のような「永遠真理」にもかかわる(第54節、および原注u)。さらに真の認識は、一般的・普遍的な理解と対比され、実在を個別・特殊的にとらえるものとされる(第55節)。

真なる認識はまた「明晰かつ判然たる知得」と言われ(第62節)、具体的には「私たちが三角形の本性に注目する場合にその三つの角が二直角に等しいことを見出すのと同じ」明晰さを有すべき認識とされる(第79節)。加えて、「もし観念が何らかのもっとも単純なものについての観念であるなら、それは明晰かつ判然としたものでしかありえないであろう」とされ、

その理由は、もっとも単純なものについての観念が、その対象を部分的にはなく全面的に認識する点に求められる（第63節）。さらに真の観念は、「いかにしてそしてなぜ或るものが存在するのか、あるいは形成されたのかをみてとらせる」（第85節）。そのうえ、すでに第33節でも語られていたように、真の観念は対象の本質をとらえるものである（第70節）。

さらに、仮構された観念、偽なる観念および疑わしい観念が、「精神の力能そのものに由来するのではなく、身体が或るときには夢見ながら、また或るときには目覚めながら様々な運動を受容するにつれて、外的諸原因に由来する」、「脈絡を欠いた」知得であり、すなわち「表象[*imaginatio*]」にその起源をもつものである一方で（第84節）、真の観念は「知性」（第74節）の力能そのものに由来し、そうした真の観念を有する精神は、全面的にはないにせよ、「一定の法則にしたがって」はたらいっていることになる（第85節、また第86節をも参照）。

最後に、おそらくこの精神ないし知性の「一定の法則」の内実と密接に関連し、また『改善論』全体における方法の規定を考えるためにきわめて重要と思われる、真の観念の或る特性をとりあげよう。

精神は、仮構されかつその本性上偽なることがらに注意を向け、もってそれを子細に吟味し、そして知解し、さらにそこから導出されるべきことどもを適切な順序で導出するなら、容易にそれが偽であることを見抜くであろう。また仮構されたことがらがその本性上真なるものであるなら、精神がそれに注意を向け、それを知解しようと専心し、かつそこから帰結することを適切な順序で導出しはじめる場合、精神は何らの中断もなく首尾よくそれをなしとげるだろう。（第61節）

これと同様の内容が、『改善論』の終盤でも繰り返される。

精神が或る思惟に注意を向け、もってそれを入念に吟味し、かつそれから出発して、正当に導出されるべきことどもを適切な順序で導出する場合には、かりにその思惟が偽であろうものなら、精神はそれが偽であることを暴き出すだろうし、反対にもし真であるなら、何らの中断もなく首尾よく真なるものどもをその思惟から導出し続けるだろう […]。（第104節）

要するに、真なる認識という思考パフォーマンスは、諸観念の「導出」が順序だったしかたで「何らの中断もなく」連続的に遂行されることにこそ存すると考えられる³³⁾。かくて、「先だつて探究されるべきことどもを探究することによって、ものどもの連鎖が何ら断ち切られないようにしつつ正しくまっすぐに進んで」行くという順序を踏まえて導出が遂行されれば（第80節）、それらの「思惟はすべて真であり、かつ、いかなる外的対象からも規定されず、むしろ知性の力能ならびに本性のみに依存することになろう」（第71節）。

ここまで見てきた「方法の第一部」を総括してスピノザは言う。「以上、手はじめとしてなしたかぎり、私たちは自らの知性にかんする知見を得たし、また真の観念の規範を獲得したことで、もはや真なるものと偽なるもの、あるいは仮構されたものを混同する恐れがなくなった」と（第86節）。

V：方法の射程の曖昧さ

ところが、この導出の順序あるいは探究の順序にかんして、『改善論』には向きのことなる二つの方向性が見出される³⁴⁾。しかもこの著作は結局のところ、この二つの方向性が、向きのことなる二つのものとして明確化され、腑分けされることもなく、またそれゆえそれらの方向性の関係も明らかにされないまま、未完の状態に閉じられる。方法の射程にかんするこの根本的な曖昧さが、方法と体系の結びつきという伝統的な思考の枠組みと相まって、スピノザ哲学全体における『改善論』の位置づけや意義にかんする解釈者たちの誤解を呼び込んだのではないか。以下ではこの見通しを検討していこう。

スピノザは、与えられている観念の規範にのっとって精神がいかに規制されるべきかを示す方法が「よい方法」として語っていた（第38節）。しかしその直後に彼は「もっとも完全な」方法に言及する。

二つの観念のあいだにある関係は、これらの観念の形相的本質のあいだにある関係と同一であるから、ここから帰結するのは、もっとも完全な存在者の観念についてのものである。反照的認識こそが、その他のあらゆる観念についての反照的認識よりもより秀でていることになる、ということである。すなわち、もっとも完全な存在者について与えられている観念の規範にのっとって精神がいかに導かれるべきかを示す方法こそが、もっとも完全なものであるということになろう。（第38節）

この言明の背景にあるのは、おそらく『改善論』終盤で明示される知性の特質のうちのひとつ、すなわち、観念の完全性が、その観念が表現する対象の完全性と比例するという性質であろう³⁵⁾。つまり、「もっとも完全な存在者」とは、それ自身文字どおり「もっとも完全」であろうし、それを対象とする観念自体がそれゆえに「もっとも完全」な観念になるはずである。そして方法が反照的認識であるなら、この「もっとも完全な」観念についての反照的認識が、「もっとも完全な」方法となる。ここまでは容易に理解される。しかし問題は、私たちがそうした存在者の観念を有しているのかどうか、そしてまだ有していないとすれば、いかにしてそれを獲得しうるのかということである。スピノザはたしかに「もっとも完全な存在者について与えられている観念」と語っている。しかしここでも所与性を強く読み込む必要はない³⁶⁾。というのも、『改善論』の前半部を整理し、その後続くべき課題を要約した第49節では次のように言

われているからである。「方法は私たちが最高完全な存在者の観念を手にしたときにこそもっとも完全なものとなる、ということを見た。以上のことから、まずはじめに、できるだけ速やかにこのような存在者の認識に達することに最大限専心しなければならないであろう」（第49節）。要するに、「このもっとも完全な存在者の観念はまだ与えられてはいない³⁷⁾」のである。

さて、このもっとも完全な存在者についての観念の獲得が目指される理由を、別の角度からも確認しておこう。それは先の引用の冒頭部、「二つの観念のあいだにある関係は、これらの観念の形相的本質のあいだにある関係と同一である」という表現に関連する（第38節）。手短かに要点のみをまとめよう。

スピノザによれば、「自然のうちに実在するすべてのもの」は「他のものと関連をもつ」（第41節）、すなわち他のものから産出され、あるいは他のものを産出する（第41節、原注p）。つまり、自然のうちに実在するものはすべて、原因と結果の産出的因果連関によって連関している。そして「自然のうちにはその諸法則をそこなういかなることがらも存しえず、むしろすべてはその一定の諸法則にしたがって生じ、そのためそれらが一定の諸結果を一定の諸法則にしたがって、ゆるぎえない連結において産出する」（第61節、原注a³⁸⁾）。ところで、私たちは先に、真の観念を有する精神が「一定の法則にしたがって」はたらくとされていることを見た（第85節）。この法則は、自然のうちなる法則と連動している。つまり、観念の対象となるものが一定の法則にしたがって、原因と結果の産出連関によって結びついているのとまったく同様に、真なる認識という思考パフォーマンスを実現しえている精神は、諸観念の導出連関のただなかで、この原因と結果の産出連関をいわば反映させていることになる、ということである（cf. 第42節、第85節、第91節³⁹⁾）。端的に言えば、「諸観念間の関係とそれらの観念対象ないし対象間関係との「…」根源的な同一性⁴⁰⁾」が肯定されているのである。以上を踏まえれば、精神が自然のありさまを「全面的に反映するためには、精神のすべての観念を、自然全体の起源と源泉を反映する観念から出発して産出し、もってこの観念がまた残りのすべての観念の源泉となるようにしなければならない」という言明は理解されよう（第42節）。

まとめよう。一方では、「精神が正しく歩み出すために踏み込むべき最初の途」として、「何であれ与えられた真の観念の規範にのっとって」探究を行いながら（第49節）、「もっとも完全な存在者」、「自然全体の起源と源泉」あるいは「すべてのものの原因」（第99節）についての認識に、できるだけはやく到達することが目指される。そして方法はそこに到達したときにもっとも完全なものになるとされていた。しかし他方で、この自然全体の起源である存在者についての観念から出発して、原因と結果の産出連関にそくして、順序だったしかたで諸観念の導出を行っていく必要性が説かれる。そして「真の方法」とは、「真理そのもの、あるいは諸々のものの対象的本質、あるいはそれらのものどもについての観念が（これらはすべて同じものを意味する）しかるべき順序で探究される途」とされており（第36節、強調引用者）、この途はすでに体系（「哲学」）そのものであると考えられた。しかもスピノザは、自然全体の起源である存在者について、「この存在者こそまさしく唯一で無限である。すなわち存在するものの

すべてであり、その外にはいかなる存在も与えられない」と語り（第76節）、この言明に付された注においてまさに「神」に言及する（原注z、また第92節原注fも参照）。そのためこの存在者から出発した、原因と結果の産出連関にそくした導出が、『エチカ』の体系そのものであると理解されても不思議ではない。しかも周知のように、これら二つの方向性のいずれもが実現されることなく『改善論』は閉じられるわけだから、結局のところ、これらの方向性の関係、および方法の役割についての理解は解釈者たちにゆだねられることになる。

こうした背景を承けて提示されることになる典型的な解釈がアルキエのものであろう。彼は『改善論』のうちに二つの方法を見出す。第一に、「まずは任意の真の観念から神の観念へと上昇していく」、体系に「先立つ方法」、そして第二に、「神の観念から出発して諸々のものについての観念に向かう導出的方法」である⁴¹⁾。この二つの方法の共存が、彼によれば、『改善論』がはらむ「根本的な曖昧さ」にほかならない⁴²⁾。そしてアルキエによれば、結局のところ、「探究の方法は体系に場所を譲ることになるだろう⁴³⁾」。というのも、「彼の体系が、その語の厳密な意味における方法を、すなわち段階を経るように人間を真理へと導くあらゆる途、あらゆる道程を排除するからである⁴⁴⁾」。なぜなら、アルキエによれば、方法は人間の観点から出発した骨の折れる探究を含意するが、スピノザの体系は、神の観念から出発した、原因の順序にそくした導出しか許容しないからである⁴⁵⁾。

このようなアルキエの解釈には明らかに、方法と体系の対立という思考の枠組み、および『改善論』を体系にとっての「方法論的導入」とみなす先入見が前提されている⁴⁶⁾。しかし彼以外の多くの解釈者もまた、このような思考の枠組みと先入見を共有しているように思われる⁴⁷⁾。私たちが本稿の冒頭で見たように、方法と体系は、哲学史において対になるものとして考えられてきたのである。

もしこのような解釈が正しいとするなら、著作として完成された『エチカ』が存在する以上、極端なところでは、『改善論』は要するに「哲学」への方法論的導入という、「失敗に帰したひとつの試み⁴⁸⁾」、あるいは見限られた夢のようなものとなるほかない。つまり方法と体系の対立という思考の枠組み、および未完のまま残された『改善論』を、体系にとっての「方法論的導入」とみなす先入見を前提とするかぎり、スピノザ哲学全体における『改善論』固有の意義が見失われてしまうことにもなりかねないのである。

私たちは先に、「途」としての方法は、体系（「哲学」）と一体のものであるのか、それとも体系とは区別されるものなのかと問うていた。いまや問いの定式を変更しなければならない。『改善論』が論じている方法は、そもそもどのような場面に適用されるものとして考えられていたのだろうか。方法の位置づけにかんして、それが「哲学」（体系）に通じるものであるとする理解以外の可能性はないのだろうか。

VI：方法の位置づけにかんする仮説

スピノザが『改善論』を、あるいは少なくとも方法についての議論をある時期に決定的に放棄したのではなく、むしろ生涯にわたってそれを気に懸けていたと考える解釈者は多い⁴⁹⁾。その根拠とされるのは、1666年6月10日付けのバウメーステル宛書簡（「書簡37」）、および1675年1月のものと推定されるチルンハウス宛書簡（「書簡60」）である。『改善論』テキストの作成時期には様々な議論があるが、しかしこれらいずれの書簡も、現在残されている『改善論』が書かれた後のものであることは確かと言える⁵⁰⁾。まずは方法にかんする言及が見られるこれらの書簡を手がかりにして、『改善論』における方法の位置づけを再考してみよう。

とりわけ「書簡37」には、方法と途の関係にかんするきわめて明快な記述が見出される。「私たちが崇高なことがらについての思考において、踏み誤ることなく、倦怠なしに進むことのできる或る方法が存するか、あるいは存しうるか、それとも、私たちの身体と同様に、私たちの精神もまたたまさかの状況に服し、また私たちの思考は技術によってよりもむしろ偶運[fortuna]によって支配されることのほうが多いのか」と言うバウメーステルの問いに対して、スピノザは次のように答えている。

この問いに対する十分な応答になるだろうと私が思うのは、私たちがそれによって自らの明晰かつ判然たる諸観念を整序し[dirigere]、かつ連結することのできる方法が必然的に存しなければならないということ、そして、知性が身体のようにたまさかの状況に服することはない、ということを示すことです。このことはじつに、ひとつ、あるいは同時に複数の明晰かつ判然たる知得が、無条件に他の明晰かつ判然たる知得の原因でありうるという、このひとつのことから明らかです。それどころか、私たちの形成するすべての明晰かつ判然たる知得は、私たちのうちにある他の明晰かつ判然たる諸知得からのみ生じることができ、私たちの外なる他のいかなる原因をも認めないのです。ここから帰結するのは、私たちが形成する明晰かつ判然たる知得が、もっぱら私たちの本性、およびその確実に確固たる諸法則に、すなわちひとり私たちの力能にのみ依存し、反対に偶運には依存しないこと、すなわち、これまた確実に確固たる諸法則によってはたらくものではあるが、しかしながら私たちには知られておらず、さらに私たちの本性ならびに力能と異他的な諸原因には依存しないということです。それ以外の諸知得にかんしてはといえば、それらはこのうえなく偶運に依存すると私は考えます。したがって以上から明らかなのは、真の方法がどのようなものでなければならないか、また主としてそれが何に存するのか、ということですが、それはすなわち、もっぱら純粹知性およびその本性ならびに諸法則の認識にのみ存し、この認識が獲得されるために何よりも先に必要なのは、知性と表象を区別すること、いうなら、真の観念と他の諸観念、すなわち仮構された観念、偽なる観念、疑わしい観念、一般的に言えば記憶にのみ依存するすべての観念を区別することです。この点を知解する

ためには、少なくとも方法がそれを要求するかぎりでは、精神の本性をその第一原因によって認識する必要はなく、むしろベーコンが教えるようなしかたで、精神の、いうなら諸知識についての短い記述をとりまとめることで十分です。さて以上手短かに真の方法を説明するとともに証明し、同時に、私たちがそこへ至る途を示したと思います。しかしなおあなたに注意してもらいたいのは、これらすべてのためには、たゆみなき省察とゆるぎなき心、ゆるがぬ決心とが求められ、そしてこれらを手にするには、何よりもまず生活の確かな様式および規則を定め、或る確かな目的を掲げることが必要なのです⁵¹⁾。

ここでは「真の方法」と「そこへと至る途」がはっきりと区別されている。後者の課題はしかし、『改善論』では「方法の第一部」（第50節）の課題に対応しており、はっきりと「方法がはたさなければならない」課題とされていた（第49節）。さらにこの書簡によれば、方法は「精神の本性をその第一原因によって認識する」ことを要求しないとされ、この点で精神の本性をその「起源⁵²⁾」から論じる『エチカ』の体系（とりわけ第二部）ともことなる射程をもつ。しかも最高完全者の観念から出発した導出という論点も見られない。それゆえ（真の）「方法」は、少なくともこの書簡においては、きわめて限定された課題を扱うことになる。すなわちそれは、「純粹知性およびその本性ならびに諸法則の認識にのみ」（強調引用者）かかわるとされ、またその方法の行使、いうなら「純粹知性の使用⁵³⁾」によって、「自らの明晰かつ判然たる諸観念を整序し、かつ連結すること」が可能になると考えられている。とはいえ、こうした方法および途の理解は、『改善論』の理説と決定的にへだたるものではない。この点を確認したうえで、あらためて問題を定式化しなおそう——この方法の行使、あるいは純粹知性の使用は、どのよう⁵⁴⁾な場面で実践されるのか。

「書簡60」の宛先であるチルンハウスからの書簡（「書簡59」）に、この問題にかかわるきわめて興味深い論点が複数見出される。

チルンハウスは、「いまだ認識されざる諸真理についての認識を獲得するにさいして理性を正しく導くあなたの方法、および自然学における一般理論」を手にするのはいつかと問うたのち、「あなたがこれらの主題について、最近 [jam modo] 諸々の大きな進歩をなされたことを私は知っています」と言う⁵⁴⁾。この「諸々の大きな進歩」の内実は非常に興味をそそるが、その具体的な内実を明確に知るよすがは、残念ながら残されていない⁵⁵⁾。とはいえこの書簡の興味はこれに尽きるわけではない。

まず「いまだ認識されざる諸真理についての認識を獲得するにさいして理性を正しく導くあなたの方法 Methodum tuam recte regendae rationis in acquirenda veritatum incognitarum cognitione」という表現が、デカルトの『方法序説』のラテン訳タイトル（Dissertatio de methodo recte utendi ratione et veritatem in scientiis investigandi⁵⁶⁾）を彷彿とさせる。周知のようにデカルトは、「方法序説」の後に「屈折光学」「気象学」「幾何学」の三試論を付し、「方法序説」が「方法を教えようとする意図はなく、むしろたんにそれについて話すこと」のみを狙っていると語り、

その理由として、方法が「理論というよりもむしろ実践のうちに存する」点を挙げている⁵⁷⁾。要するに、三試論のなかでこそ方法が実践されるということである。チルンハウスが「方法」にかんするスピノザの論述を先の名称で呼び、またこの論述と「自然学における一般理論」とを並べ置いたのは、まさにこのような背景が彼の念頭にあったためではないだろうか。そして私たちは、こうした理解をさらに敷衍することで、デカルトの「方法序説」が、彼の形而上学が展開される『省察』に直結するというよりもむしろ三試論に結びつくように、スピノザの方法も『エチカ』の導入となるのではなく、むしろよりひろい場面で実践されるいわば汎用的な方法として考えられていたのではないか、という仮説を提示したい⁵⁸⁾。

VII：仮説を支持するように見えるいくつかのテキスト

この仮説を支持するようと思われるいくつかのテキスト的な根拠がある。第一に、「書簡59」におけるチルンハウスの次の言明を見よう。

私があなたのもとにおりましたころ、あなたは私に、未知の諸真理の探究にさいしてあなたが用いている方法を示してくださいました。私の経験によれば、この方法はきわめて優れており、私がそれについて理解したかぎりでは、しかもそれでいてきわめて容易なものでした。そしてこの方法にしたがっただけで、私は数学において大きな進歩をなしたと肯うことができます⁵⁹⁾。

見られるように、スピノザがチルンハウスに教示したとされる方法は、数学において実践され、「大きな進歩」をもたらしたと言われている。体系との関係は問題にされていない。そしてここで語られている「方法」が『改善論』の内容と重なるものであることは、この引用に続く箇所から確認できる。チルンハウスはそこでスピノザに、「十全な観念、真の観念、偽なる観念、仮構された観念、および疑わしい観念の真の定義」を求めたのち⁶⁰⁾、次のように書いている。

たとえば私たちが、私たちの誤謬の真なる起源は何に存するのかを問い尋ねる場合、デカルトはそれが、まだ明晰に知得していないものどもに私たちが同意を与えることにあると答えるでしょう。しかし、これがこのことについての真の観念であるにしても、それについてさらに十全な観念をもつことがないかぎり、私たちはまだこれをめぐって知る必要のあるすべてのことを規定することはできないのです。この十全な観念を手にするために、私はさらにこの概念の原因を探究します。つまり、私たちが明晰に知解されないものどもに同意を与えるということがどうして起こるのかを探究するのです。そして私はこのことが認識の欠損 [defectus cognitionis] から生じると答えます⁶¹⁾。

まず指摘できるのは、偽なる観念と仮構された観念がまさに「認識の欠損」に由来するということが、『改善論』の末尾（第110節）で語られていることである。そして引用部の議論の流れを見ると、カーリーが言うように、「チルンハウスはどうやら、或る（創造された）ものの十全な観念が、『改善論』第96節において定められた、創造されたものの定義の諸要件を満たすだろうと考えている⁶²⁾」。つまり、その定義は「最近原因」を含まなければならないという要件である（第96節）。とはいえスピノザ自身は、「方法にかんすることについては、まだ順序立てて書いてはいない⁶³⁾」と返答するだけだから、チルンハウスの言う方法の詳細な内実を知ることは困難であるが、いずれにせよ、上に引いた箇所にかぎってみれば、『改善論』の内容と重なるものであることは確かである。そして、チルンハウスはそのような方法をこそ数学の領域において実践し、しかも大きな成功をおさめたと語っているのである。

第二に、先に引用した「書簡37」の末尾では、真の方法に至る途を踏破し、その方法を行使するためには、「たゆみなき省察」が求められ、さらにそのためには生活規則を定め、目的を掲げる必要が説かれていた。こうした点は、すでに『改善論』の冒頭で語られていたことがらにほかならない（第7節～第17節）。そしてまさに『改善論』のこの箇所のなかで、次のように記されていたことが注目される。「精神が全自然ととりもつ合一についての認識」を獲得することを目的と定めたいうえで、さらにこれを他の人々と共有するために必要とされるのは、

[第一に] このような本性を獲得するに十分なだけ、自然について知解することである。次に、できるだけ多くの人々が、できるだけ容易にかつ安心してそこに至るために望ましい社会を形成することが必要である。加えて、[第三に] 道徳哲学ならびに子どもたちの教育にかかわる理説に力をそそぐべきである。また健康はこの目的に至るまでとして取るに足らないものではないので、[第四に] 医学の全面的な整備が求められる。さらに、技術によって多くの困難なことがらが容易になり、また私たちは生活のなかで多くの時間と便宜を技術のおかげで手にすることができるので、それゆえ [第五に] 機械技術論も決して軽視されてはならない。（第14節、第15節）

そしてこれらは、ほかならぬ「私たちのねらいに必要な諸学」として提示されているのであり（第14節に付された原注d）、方法が何らかのしかたでかわる領域のひろさをうかがわせるものであろう。

最後に、『改善論』がはじめて世に問われたラテン語版『遺稿集』（OP）の編者による序文では、『改善論』にかんして以下のように語られている。

「知性改善」についての論考は、その文体と [そこに含まれる] 諸概念が示すように、私たちの哲学者の初期の仕事のひとつである。そこにおいて論じられることがらの価値の高さ [dignitas]、およびそこで定められている目標の大いなる有用性が、すなわち、ものど

もについての真なる認識へと向かう、きわめて容易かつきわめて平坦な途を知性に対してひらくことが、それを完成にまでもたすべくつねに著者を駆り立てていた。ところが、その仕事の重み、[それに求められる]深い省察、およびその仕事の完成に求められていたことがらについての幅広い学知[vasta Scientia]が、彼の歩みを遅くしてしまい、もってこの仕事が完成にもたらされなかった原因ともなり、また[この論考の]あちこちで何かが欠けるゆえんにもなったのである。というのも、著者自身が付加した諸々の注解においてしばしば述べられているように、彼が論じていることは、彼の哲学においてであれ、別のところにおいてであれ、より詳細に証明されるべきであり、あるいはより敷衍したかたちで説明されるべきだからである⁶⁴⁾。

注目したいのは、第一に、『改善論』の完成には「幅広い学知」が必要だとみなされていること、第二に、この論考のいくつかの論点が、「哲学」以外のところでも詳細に議論されるべきとされていること、以上の二点である。これら二点から、ここでもまた、「哲学」にのみ限定されることのない、方法のかかわる射程のひろさがみてとれる。最後に、序文の全体を見ても、『改善論』が「哲学」(ないし『エチカ』)の導入として考えられていたということを示唆する記述はないし、むしろOPの著作配列において『知性改善論』が配されているのは、『エチカ』(と『政治論』)の後なのである。先の「書簡59」の事例と考え合わせれば、チルンハウスを含め、OP编者らスピノザの周囲の人々は、『改善論』の方法が、『エチカ』への導入などではなく、むしろよりひろい適用範囲をもったものであるとの理解を共有していたと言えるのではないだろうか。

もちろんこれは仮説にすぎない。しかしスピノザの思想全体の射程にかんして、視野を広げることが可能にする仮説ではないかと思う。

注

- 1) 加藤 [1997] pp. 4-5.
- 2) この名称規定がアリストテレス自身によるものではないことについては、たとえば中畑 [2008] pp. 547-548を参照。
- 3) 高橋 [2014] p. 577.
- 4) 加藤はアリストテレスにおけるメトドスの用例のうちに、「一定の主題に関する論究の手続き、方式、道筋[…], 論証法」と、「そのような一定の道筋にしたがってなされる「一つづきの論究」すなわち「学問」や「体系」という二義を識別し、前者を「われわれに対して先なるもの」(現象)から「そのもの自体の成り立ちにおいて先なるもの」(原因、原理)へと「遡る道」として論究している(加藤 [1997] pp. 7-10)。
- 5) 引用はそれぞれ、Kant [1998], BXXII, BXXXVI-XXXVII. なお本稿における外国語文献からの引用は、注記しないかぎり拙訳であり、引用文中の[]は引用者による挿入である。

- 6) Hegel [1830/2011] p. 43 (強調は原文)。
- 7) たとえば「規則4」では、「諸々のものの真理を探究するための方法が必要である」と明言される(ATX371: 2-3)。デカルトからの引用は慣例にしたがい、AT版デカルト著作集の巻数(ローマ数字)、頁数、行数で表記する。
- 8) Marion [1991] pp. 37-38.
- 9) Marion [1991] p. 38.
- 10) この「規則4」は、方法が主題となる前半部(371: 4-374: 15)と、「普遍学 Mathesis universalis」(378: 8-9)が主題となる後半部(374: 16-379: 13)に区別でき、AT版も参照している写本のひとつである「ハノーヴァー本」では後半部が付録にまわされ、近年発見された「ケンブリッジ写本」では前半部しか含まれておらず、『規則論』テキストの成立事情をめぐって問題となるところであるが、本稿はこの問題を扱うべきところではない(cf. Descartes [2016] p. 673, n. 62)。
- 11) ATX371: 4-372: 19.
- 12) ATX425: 10-12 (強調は引用者)。
- 13) Descartes [1988] p. 91, n. 2 (強調はアルキエ)。
- 14) 引用はそれぞれ「規則8」, ATX396: 26-397: 1, ATX398: 4-5 (強調は引用者)。
- 15) マリオンもまた「規則4」における、諸学に対する方法の先行性を指摘している(Marion [1981] pp. 56-59)。
- 16) Macherey [1979/1990] p. 59.
- 17) Spinoza [1992] p. 210におけるルッセルの言明。なお本稿は、『規則論』と『改善論』それぞれにおいて示される方法の性格や位置づけの対比のみを関心としており、スピノザ自身が『規則論』を読んでいたかどうかを問題にしない。この問題については、たとえばMarion [2021] p. 331, n. 1における整理を参照。
- 18) ATX397: 4-23.
- 19) 引用はそれぞれ、ATX373: 7-9, ATX37612-13。ガリマール版のデカルト全集の編者たちによる注においても、「規則8」の生来の規則にかんして、まさに「規則4」のこれらの箇所への参照をうながしている(Descartes [2016] p. 696, n. 172)。
- 20) Hegel [1830/2011] p. 43.
- 21) Olivo [2005] p.36, n. 1.
- 22) ラテン語『遺稿集』(以下OPと略記)では「必要とされない non opus est」となっており、ゲブハルトもこのnonを保持するが、次の「物体的道具にまつわる事情と同様」という文との一致を考えれば、nonはとりさらされるべきであり、オランダ語『遺稿集』(以下NSと略記)も肯定形にしている。ミニーニと佐藤もnonを省く読みを採用する(それぞれSpinoza [2009] p. 80, p. 139, スピノザ [2018] p. 303, 注(85))。なお『改善論』のテキストについては、基本的にOPのテキストに依拠し、他の版にしたがって読み等を変える場合にはその都度注記する。
- 23) 「確実性」や「対象的本質」と等置される「真の観念」の詳細については、秋保 [2019] 第一章第二節を参照されたい。
- 24) 秋保 [2019] 第一章および第二章を参照。
- 25) De Dijn [1996] p. 76.
- 26) ミシェル・ベイサッドもまた、第36節末尾に注を付し、「真の方法はここでは、真なるものの探究と同一視される」と指摘している(Spinoza [2009] p. 147, n. 55)。またOPにおける『改善論』の副題(「知性が最上のしかたで諸々のものについての真の認識へと導かれる途」)がすでに、このような理解をうながすように思われる。
- 27) たとえば第31節に付された原注kでは、「生まれ持った力ということによって私は、私たちのうちにあつて、外的諸原因によつてもたらされることのないものを知解するが、この点のはのちに私の哲学において説明するだろう」と言われ、デ・ダインはこの「私の哲学」がのちに『『エチカ』のかたちをとることになるもの』であると言う(De Dijn [1996] p. 77)。上野もまた「私の哲学」を『エ

- チカ』とみなす（上野 [2005] p. 166）。またミニーニは少なくとも第76節に付された原注z（「これら [唯一性, 無限性] は神の本質を示す属性ではない, このことを私は哲学のなかで示すであろう」）における「哲学」が『短論文』を指すと言う（Mignini [1987] p. 16）。他方ヨアキムは、「哲学」への参照が、『短論文』や『エチカ』などの特定の著作というよりも、「全体としてのスピノザ哲学」を示すものと考えている（cf. Joachim [1940] p. 14）。
- 28) 『エチカ』への参照指示は、*Studia Spinozana* の Citation Conventions にしたがう。
- 29) たとえば第50節を参照。
- 30) 「反省的認識」と訳されることもあるが（たとえばスピノザ [1931/2005] p. 34）、「反省」という表現は、過去の（非難されるべき）行為について省みるといった道徳的なニュアンス、あるいは意識主体による内省といった意味合いを呼び込む恐れがある。しかし『改善論』におけるこの認識は、或ることがらを認識するということが、即座に、そのことがらを認識していることを認識することに直結するように（第34節参照）、いわばある観念（認識）が原理上有する合わせ鏡のような反復構造を示しており、こうしたいわば「光学的な」（Spinoza [1992] p. 240）意味合いを反映すべく「反照的」と訳す。なおこの語は『改善論』にしか現れない。
- 31) この「与えられている真の観念 *data vera idea*」という表現では、「与える」という意味をもつ *do* という動詞の完了分詞が用いられている。これを承けてゲルーは所与性を強くとるが（cf. Gueroult [1968] p. 30, n. 42）, あまりに所与性を強くとりすぎると、方法の探究を行っている知性自身とは別のところから（たとえば啓示などを介して）この真の観念が与えられる、といったような誤解を招きうる。「与えられる」という表現に所与性を強く読み込む必要はない。コイレやミシェル・ベイサッドは、*datur* はたんに「ある」「存する」という程度の意味であると理解している（Spinoza [1994] p. 103, Spinoza [2009] p. 147, n. 58）。私たちとしてもその程度の意味で理解する。
- 32) Macherey [1979/1990] p. 56.
- 33) cf. Viljanen [2020] pp. 133-134.
- 34) 佐藤も同様の指摘を行っている（佐藤 [2005] pp. 137-138）。
- 35) cf. Spinoza [2003] p. 214 におけるレクリヴァンの注釈。
- 36) 本稿注31を参照。
- 37) 佐藤 [2005] p. 137.
- 38) この注はOPでは少し前の第60節の末尾付近に付されているが、NSの箇所にしたがった。
- 39) より詳しい議論として、秋保 [2019] pp. 60-64を参照。
- 40) Spinoza [1992] p. 244.
- 41) Alquié [1981/ 1991] p. 57, cf. pp. 59-60.
- 42) Alquié [1981/ 1991] p. 55.
- 43) Alquié [1981/ 1991] p. 57.
- 44) Alquié [1981/ 1991] p. 52.
- 45) cf. Alquié [1981/ 1991] pp. 53-54.
- 46) Alquié [1981/ 1991] p. 53.
- 47) このような解釈は枚挙に暇がないが、たとえばViolette [1977] p. 303, 佐藤 [2005] p. 147, 注 (3) などを参照。かつて私たち自身もまた、こうした先入見を無批判に前提していた（秋保 [2019] p. 35）。コイレによれば、「私たちがスピノザの「方法」を見出すのは、方法的反照が思考の行使と進展に続き、それに伴うところの『エチカ』それ自身において」であり（Spinoza [1994] p. XXI）, この事態こそが、「方法論的な導入」として意図された『改善論』（pp. IX-X）が未完のまま残された理由であるとする（pp. XX-XXI）。A.ギャレットは、「『改善論』が、「哲学」と呼ばれる別の著作にとっての土台を提供する方法論的／論理的議論として意図されていた」ということを、「争われていない二つの事実」のひとつとみなしている（A. Garrett [2003] p. 74）。デ・ダインは「『改善論』と『エチカ』がひとつの大きなプロジェクトを形成する」と考え（De Dijn [1996] p. vii）, 『知恵への途 *The Way to Wisdom*』と題する自らの著作を、『改善論』の注釈を行う「途」の部分と、『エチ

- カ』を扱う「知恵」の部分によって構成している。上野によれば、「『知性改善論』は、説明を導く規範としての「最高完全者の観念」に想到したとき方法は完成するだろうと述べていた (TIE38, 39)。完成と同時に方法は解明の役目を終え、『エチカ』の原因による説明にバトンタッチする。そう考えれば両者の違いに合点が行く。実際、従来から指摘されてきたように、スピノザは両者をセットにして構想していたと思われるふしがある」(上野 [2005] p. 167)。ウィリヤネンは「『改善論』の方法論がいかにして『エチカ』の存在論と接続されるのか」を問題としているが、これら二著作が「接続される」ことは問題としていない (Viljanen [2020] p. 132, 強調引用者)。
- 48) Violette [1977] p. 304.
- 49) A.ギャレットはこのことを、『改善論』にかんする「争われていない二つの事実」のうちのひとつとみなす (A. Garrett [2003] p. 74, 本稿注47をも参照)。また De Dijn [1996] p. 11をも参照。
- 50) 『改善論』執筆時期をめぐる問題にかんしては、『短論文』のそれと併せて、スピノザ [2018] の訳者佐藤による「解題」が詳しい (スピノザ [2018] pp. 467-552)。
- 51) 「書簡37」, Geb., IV, p. 188: 4-20, p. 189: 1-15。
- 52) 「精神の本性および起源について」(『エチカ』第二部表題)。
- 53) Mignini [1979] p. 102, n. 38. なおミニニは、この書簡の言う真の方法へと至る途について、「純粹知性の使用(論理学)への準備としての方法は、不完全性や誤謬の状態からより大きな純粹さへと進んでいく道のり、すなわち「知性の改善」として理解されるべきではない」と語り (ibid.), また「真の方法」が「精神の自律的で超越論的な法則」を内実とする「オルガノン」であると言う (p. 101)。しかしこうした理解はスピノザのテキストにそくしたのではなく、方法をめぐる道具と途の形象にかんするミニニなりの理解を押しつけたものと言わざるをえない。
- 54) 「書簡59」, Geb., IV, p. 268: 18-21。なおjam modoをはっきり「最近」と訳すのは Spinoza [2010] pp. 321-322。
- 55) 「書簡60」でスピノザは神についても、その定義が作用因を表現しなければならぬと語る (Geb., IV, p. 270: 19-p. 271: 7) が、『改善論』における「創造されざるものの定義」の第一の要件は、「あらゆる原因を排除する」ことを求めていた (第97節)。たとえばこうした点が「大きな進歩」にかかわるのかもしれないが、その「進歩」の結果として、最高完全者(神)からの順序にそくした導出という論点が「哲学」(『エチカ』)の領野に引き渡された可能性も考えられる。とはいえ、いずれにせよ推測の域を出ない。
- 56) ATVI540.
- 57) メルセヌ宛書簡, ATI349。この書簡は1637年3月のものと推定されていたが、1637年4月20日あたりのもとの考証がある (ATI668)。近年刊行が進んでいるガリマール版のデカルト全集でも後者の日付を採用している (Descartes [2013] p. 138)。
- 58) もちろんこの方法の汎用性という論点と、現在私たちの手元にある『改善論』のテキストが含む理論的諸問題、およびその未完の理由は別の問題である。
- 59) 「書簡59」, Geb., IV, p. 268: 30-p. 269: 4。
- 60) Geb., IV, p. 269: 4-6。
- 61) Geb., IV, p. 269: 15-23。
- 62) Spinoza [2016] p. 431, n. 129。
- 63) 「書簡60」, Geb., IV, p. 271:8-9。
- 64) OP, pp. 32-33。

参考文献

- 秋保亘 [2019] 『スピノザ 力の存在論と生の哲学』法政大学出版局。
 上野修 [2005] 「スピノザと真理」『真理の探究 17世紀合理主義の射程』村上勝三編, 知泉書館,

- pp. 155-176。
- 加藤信朗 [1997] 「ホドスとメトドス—哲学の道について」『哲学の道 初期哲学論集』創文社, pp. 3-53。
- 佐藤一郎 [2005] 「方法と経験—「知性改善論」の方法の原則論」『真理の探究 17世紀合理主義の射程』村上勝三編, 知泉書館, pp. 127-154。
- スピノザ [1931/2005] 『知性改善論』畠中尚志訳, 岩波文庫。
- スピノザ [2018], 『知性改善論 神, 人間とそのさいわいについての短論文』佐藤一郎訳, みすず書房。
- 高橋久一郎 [2014] 『「分析論後書」解説』『アリストテレス全集2 分析論前書・分析論後書』岩波書店, pp. 575-608。
- 中畑正志 [2008] 「アリストテレス」『哲学の歴史1』内山勝利責任編集, 中央公論新社, pp. 517-639。
- Alquié, Ferdinand [1981/1991], *Le rationalisme de Spinoza*, PUF (2d éd.).
- De Dijn, Herman [1996], *Spinoza, The Way to Wisdom*, Purdue University Press.
- L'Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Nouvelle présentation par P. Costabel et B. Rochot, Vrin, 1964-1974. 【AT版デカルト著作集】
- Descartes, René [1988], *Œuvres philosophiques*, tom. I, textes établis, présentés et annotés par Ferdinand Alquié, Édition illustrée.
- Descartes, René [2013], *Œuvres complètes VIII, Correspondance, I*, sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner, Gallimard.
- Descartes, René [2016], *Œuvres complètes I, Premiers écrits, Règles pour la direction de l'esprit*, sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner, Gallimard.
- Garrett, Aaron V. [2003], *Meaning in Spinoza's Method*, Cambridge University Press.
- Gueroult, Martial [1968], *Spinoza I-Dieu*, Georg Olms.
- Hegel, G. W. F. [1830/2011], *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830)*, herausgegeben von Friedhelm Nicolin und Otto Pöggeler, Felix Meiner.
- Joachim, Harold H. [1940], *Spinoza's Tractatus De Intellectus Emendatione*, Oxford At The Clarendon Press.
- Kant, Immanuel [1998], *Kritik der reinen Vernunft*, Nach der ersten und zweiten Originalausgabe herausgegeben von Jens Timmermann mit einer Bibliographie von Heiner Klemme, Felix Meiner.
- Macherey, Pierre [1979/1990], *Hegel ou Spinoza*, La Découverte (2d éd.).
- Marion, Jean-Luc [1981], *Sur l'ontologie grise de Descartes*, Vrin (2d éd.).
- Marion, Jean-Luc [1991], « Quelle est la méthaphysique dans la méthode ? La situation méthaphysique du *Discours de la Méthode* », dans *Questions cartésiennes I, Méthode et méthaphysique*, PUF, pp. 37-73.
- Marion, Jean-Luc [2021], « Spinoza, l'adéquation et la vision », dans *Questions cartésiennes III, Descartes sous le masque du cartésianisme*, PUF, pp. 311-347
- Mignini, Filippo [1979], « Per la datazione e l'interpretazione del *Tractatus de intellectus emendatione* di B. Spinoza », *La Cultura*, Anno XVII, N. 1/2, pp. 87-160.
- Mignini, Filippo [1987], « Données et problèmes de la chronologie spinozienne entre 1656 et 1665 », *Revue des Sciences Philosophiques et Theologiques*, t. 71, pp.9-21.
- Olivo, Gilles [2005], *Descartes et l'essence de la vérité*, PUF.
- Spinoza, *De Nagelate Schriften van B. d. S. Als Zedekunst, Staatskunde, Verbetering van't Verstant, Brieven en Antwoorden, uit verscheide Talen in de Nederlandsche gebragt*, 1677. 【オランダ語『遺稿集』NS】
- Spinoza, *Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters Universitätsbuchhandlung, 1925. 【ゲブハルト版著作集 Geb.】

- Spinoza [1992], *Traité de la réforme de l'entendement*, introduction, texte, traduction et commentaire par Bernard Rousset, Vrin.
- Spinoza [1994], *Traité de la réforme de l'entendement*, texte, traduction et notes par A. Koyré, Vrin, 5^{em} éd.
- Spinoza [2003], *Traité de la réforme de l'entendement*, introduction, traduction et commentaires par André Lécrivain, GF Flammarion.
- Spinoza, *Opera posthuma, Amsterdam 1677*, Riproduzione fotografica integrale, a cura di Pina Totaro, prefazione di Filippo Mignini, Quodlibet, 2008. 【ラテン語『遺稿集』OP】
- Spinoza [2009], *Œuvres-I premiers écrits*, Édition publiée sous la direction de Pierre-François Moreau, PUF.
- Spinoza [2010], *Correspondance*, Présentation et traduction par Maxime Rovere, GF Flammarion.
- The Collected Works of Spinoza*, Vol. II, Edited and Translated by Edwin Curley, Princeton University Press, 2016. 【Spinoza [2016]】
- Viljanen, Valtteri [2020], « The Young Spinoza on Scepticism, Truth, and Method », *Canadian Journal of Philosophy*, vol. 50: 1, pp. 130–142.
- Violette, R. [1977], « Méthode inventive et méthode ineventée dans l'introduction au « De Intellectus Emendatione » de Spinoza », *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, t. 167 :3, pp. 303–322.

(あきほ わたる)

Meaning of the Method in Spinoza's *Tractatus de Intellectus Emendatione*

Wataru AKIHO

Abstract

This paper addresses an interpretation of the meaning of Spinoza's method which is presented in his early work *Tractatus de intellectus emendatione* (hereafter TIE), by focusing on two figures "way" and "tool". We present our interpretation as follows: first, we bring out characteristics of Spinoza's method by contrast with the determinations of the method in Descartes' *Regulae ad directionem ingenii*, one of Descartes' early works whose influence upon TIE has been disputed. Then, by articulating the functions of Spinoza's method, the paper points out the complication of his discussion on the relation between method and philosophical system. Besides, the paper shows that this complication provokes the ambiguity of Spinoza's description concerning the role the method has to fulfill, and that this ambiguity may bring about, on the side of interpreters, misunderstanding on the role of Spinoza's method, due to the historical conception of the connection between method and philosophical system, and also because of their prejudice that TIE is the methodological introduction to Spinoza's philosophical system. Finally, the paper offers a hypothesis that the method presented in TIE is not intended as an introduction to his philosophical system, but as multipurposed general method which is applicable to various sciences as mathematics and the rest.

Keywords: Spinoza, *Tractatus de Intellectus Emendatione*, Method, Way, Tool